哲学レポート

関係性のある存在

93E069　　志　賀　礼　子

去年の四月に哲学という学問に出会ってからの大きな収穫は、此処に端的に存在することの素晴らしさを知ったことでした。延原先生は、松尾芭蕉の句を引用して、「よく」見ていないと気が付かないと注意して下さいました。ですから、繰り返しながら前進していく講義の中で、「はっ」とさせられたことがあったのを憶えています。私が此処に端的に存在していることに注目したら、まるで霧が晴れてすっきりした後のように前へ歩き出すことが出来ました。これは大発見でありました。そこで、収穫したものを放置しておいては腐ってしまいますから、一年を通じて考えたところを記したいと思います。これは批判というより共感したところの告白であります。

サルトルを始め、哲学者達は学問を追求していきながら、自分の研究する学問の柱となるものを立てます。滝沢先生は、その柱が「不可分・不可同・不可逆」でしたが、この柱を築き上げる過程に出会った他の哲学者の視点にも触れて新鮮さを感じました。なぜかというと、私のまだ知らない視点で彼らが見つめて築いたものを垣間見たので、そこに新しい見方を知る意味での新鮮さがあるのです。

まず西田先生は、我々の存在しているところ（マルティン・ハイデガーの言う「世界」）が絶対無の中にあると主張しました。この世界の果てに絶対無の場所があるというのです。なんと暗く響く言葉でしょう。しかし暗くありませんでした。つまり、我々が周囲の様々なもの（人）と関係して存在しているように、我々の存在する世界も、それを包み込む絶対無の場所と関係をもって存在しているのです。また、西田哲学から出発した滝沢先生によると、この絶対無と世界の接するところに、神と人との接点を見い出すことができます。更に有り難いことに、この神と人の関係は、その人が宗教に入信しているかを問わずに成り立つのだと主張しています。なぜ一見暗く感じる絶対無の場所が明るいかは、彼の主張するところにあります。それによると、我々が気付かない時から、我々の脚下には絶えず、無条件に、我々を支えて止まぬ神人一体の関係があるようです。延原先生は、このような大規模に世界を包んでいる絶対無を「慈悲」や「恩寵」と言い表わして下さいました。そこで私も、この「関係」に注目したいと思います。

講義の中でも延原先生が芭蕉の句「よく見れば　なずな花咲く　垣根かな」を引用して教えて下さった慈悲についてです。これは絶対無から絶えずにじみ出ているものと考えられます。或るいはポコッと出てくるようにも思われますが、徹底的に明るいと言われる絶対無から出てくる慈悲は、我々の前に「出会い」として現われてくると考えました。人間は生きていく際に、どんどん自分の意味空間を拡めていきます。もちろん我々は、様々なもの（人）と関係性を持って存在していますから、意味空間を拡げていこうとする時には様々な出会いがあるはずです。それらは皆、下からの慈悲だと考えました。ひとつひとつ生じてくる出会いの中には、時に我々にマイナスの要素を与えると思われるものがあったり、プラスの要素を与えてくれるものがあっ

たりするでしょうが、全て我々の意味空間を拡げる助けとなります。

ここで注意したいことは、出会った時点でどうも、私にとってマイナスになりそうだと思うようなことも、長い目で見るとマイナスの要素を与えるような出会いなど無いということです。なぜかというと、有り難い神の慈悲の現われである「出会い」に、良いも悪いもないからです。私は小学生になって体育と出会ったときのことを思い出しました。人には得手・不得手があり、一人が容易に出来てしまうことも、もう一人には困難であったりするわけです。私にとって、体育との出会いは悲劇的でした。見事な程に、私が体育の授業で経験した種目は不得手なものばかりでした。春になると当然のように走ります。そして夏が来れば水泳があり、秋には運動会と球技が待っていて、冬になるとマット運動と跳び箱がセットになっていました。しかし、次から次へと私を出迎えるこれらの競技において、情けない思い出ばかり浮かんでくるのです。走っても記録は悪く、泳いでも遠くへ行けず、その上球技の中でもバスケットは最悪で、迅速なプレーに気持ちだけ焦っていました。そして体の柔軟性を試されるマット運動では、文字通りギクシャクした動きを見せていたのです。運動部に入っていなかったしこれだけは自信をもってできる種目も無く、時間は限られているから、要領を得た頃には次の種目に移るという悪循環を繰り返してきたのです。こうして、マイナスの出会いとしか思えなかった体育ですが、体を動かすことは嫌いではなかったし、コートの中で活躍できない時は、応援の立場で一致団結することの喜びや素晴らしさを学びました。よく考えてみたら、楽しんでいたのかもしれません。「失ってからその良さに気付く」と言いますが、正しくその通りです。振り返ってみると、マイナスの要素と思っていたのは私の早合点だったと思えるのです。むしろ、苦痛を経験した後に見つける喜びもあるのです。このように考えると、我々の根底からにじみ出ている慈悲、即ちその現われである出会いにマイナスは無いのです。

次に、「もの」ではなく「人」との出会いとして現われた慈悲について考えてみました。これもまた、私が意味空間を拡げていく上で大きな影響を与えてくれました。本来、私に最も早い時期に影響を与えるのは、その間柄から両親でしょうが、今回は別の人について述べたいと思います。同じく小学生の頃のこととなりますが、それは村松先生との出会いでした。先生は眼鏡をかけた、少し年配の女性でした。そして先生は私に、一つのもの（人）を様々な視点で見ることを教えてくれた人です。事の発端は、小学生くらいの年頃で見られる「からかい」でした。悪気が無くても、男の子が、或るいは女の子までもが仲間をからかいます。すると、からかわれた生徒は先生の所まで行って、事の次第を報告するわけです。これを「言い付ける」とも言います。そんな時、先生は誰が来ても同じ事を言っていたそうです。

「その子の良い所（長所）を一つ見つけてごらん。そして見つかったら、先生の所へ来て教えてちょうだい。」

どうでしょうか、先生から嫌な思いをさせた人の長所を探すように言われると、一生懸命になって長所探しをするのです。そして、生徒の目に映った例の子の長所を見つけると、もう怒りは消えています。不思議なものです。この場合、年齢を考えて怒りの度合いも小さいことを考慮に入れても、一人の人間を別の視点から見つめて、その人だけにある良さを見つけてしまうと、もう憎めないのです。以上が、視野を広げて見ることを教えてくれた村松先生との出会いです。

繰り返し述べてきましたが、私が絶対無の中から滲み出てくる慈悲に気付く方法でもある出会いは、やはり良いものです。私は此処に存在しています。存在することには様々なものとの

関係性があり、そのうち神人一体という関係は、私に安心感を与えてくれました。滝沢先生は彼の哲学の柱であるこの関係性を「不可分・不可同・不可逆」で説いています。その過程に多くの論争を重ねたため、とても強固な柱ができたわけです。ですから、その崩し様のない絶対性が私を安心させました。

そこで私も学者の方々に真似て柱を立ててみました。一年という短い学習で立てた小さな柱であります。すぐそこに達磨人形があります。起上小法師という名の、底におもりが入っている人形です。これは「不倒翁」とも書き表わすことができるようです。彼は底におもりが入っているから、何度押されても倒れることを知りません。その点で彼は強いのです。私には哲学者のように、自分で新しい柱を立てることは出来ませんでした。ですから出会った各々の学者の主張する「おいしいところ」だけを拾ったようなものになってしまいました。まずその外見は不倒翁としました。その中に、「此処に端的に存在すること」と書いたおもりが入っています。これは哲学を学んで最初の大発見であったし、注目すべき言葉でした。更に滝沢先生の神人一体の関係を知った今は前進あるのみです。私に、これからも意味空間を拡げていく勇気が湧いてきたからであります。どこまでも拡げられるこの空間に果てがあったとしても、そこは神の慈悲が滲み出る絶対無です。その慈悲の大規模でおおらかさのある限り大丈夫でしょう。どんどん前進して、慈悲の現われである出会いも沢山頂戴いたしましょう。たとえ行き詰まったとしても、私には不倒翁があります。何度押しても、必ず起き上がる姿を見たら、「そうだ、私が此処に存在しているという事実は、誰にも否定できないこと。そこに注目すれば、悩み事なんて小さなものではないか」と気付かされ、再び意味空間を拡げるべく歩き出せると思うのです。

さて、「此処」に着目することから始めて「関係的な存在」を考えてきました。滝沢先生の柱は、三つでひとつですが、そのうち私が先ず飛び付いたのは「不可分」でした。しかし、これを支えるには、我々の下に存在しているのが神であって、此処で支えられのは人間であること（不可逆）は変えられないし、下から絶えず支える神には、人間がどんなに頑張ってもなれません。ですから不可同なのでしょう。ここで気付いたことは、神と人との関係も三つの要素と関係し合って成り立っていることです。考え始めたら全てが関係性をもって存在しているのですね。